

インフォメーション

J A常総ひかりが提案する 「Z-GIS」を活用した大規模経営体の多筆圃場管理 ～大規模経営体の経営合理化を促進する取り組み～

茨城県のJ A常総ひかりは、常総市・下妻市・八千代町の2市1町にまたがる農業協同組合である。西部地域は、露地栽培を中心とした園芸作物の一大産地で、はくさい・レタス・ねぎ・きゅうり・なし・メロン・すいかは市場でも高い評価を得ている。

また、中央に鬼怒川、東に小貝川、西に飯沼川がそれぞれ南流し、各河川の流域は水田地帯を形成し、肥沃な土地からは良質な茨城米を生産している。特に、常総市(旧水海道地区)は、茨城県でも有数の米産地であり、管内には100haを超える大規模経営体も徐々に増加している。

ここでは、J A常総ひかりの提案により「Z-GIS」を導入し圃場管理を行う扱い手の事例を紹介する。

白地図による管理の限界

大規模経営体の圃場情報管理は従来、紙の白地図を広げて色塗りをしながら進捗などを管理する手法が一般的であったが、今後ますます農地の集約が進むなかで従来どおりの手法では次の課題がより増幅することが予測される。

- ①圃場の検索に長時間を費やす
- ②管理しようとする作業項目ごとに地図が必要である
- ③毎年変化する多くの情報の蓄積、保存が困難である
- ④地権者の確認や賃貸の履歴が正確に把握できない

J A常総ひかりでは、常総市を基軸とし、これらの課題を抱える扱い手に対し、全農の営農管理システム「Z-GIS」を活用した圃場管理を提案し、導入するに至った。

作業効率、生産性の向上に期待

「Z-GIS」を導入した扱い手W氏 [経営面積：約120ha]



▲従来は白地図を広げて圃場情報の管理を行っていたが、「Z-GIS」の導入でさまざまな情報をインターネット上の地図に表示することができるようになった



(水稻・麦)、圃場数:約700筆]からは、次のような評価が寄せられた。

①700筆もあると、自分では圃場の場所や情報を把握できていても、従業員は同等の理解がで

きていた。そのため、指示した圃場にたどり着くことができないことが多々あった。「Z-GIS」を導入することで今後は地図と圃場データが紐付くので、作業効率は大いに向上すると思う。

②飼料米も含めて米の栽培品種は多様化してきた。どの圃場にどの品種を作付けしたかだけでなく、これからは肥料や農薬の使用履歴、病害虫の発生状況、土壌肥沃度なども「Z-GIS」で管理していけばより生産性も向上すると思う。

③Excelで管理したい項目を任意で追加することができる非常に便利である。今まで莫大な時間を費やしていた圃場管理が迅速かつ正確に行えるうえに、これまで管理していなかった項目も管理できそうなので、労働時間の短縮や生産性の向上が大いに期待できる。



W氏は御自身と父親、そして長女も就農しており、親子三世代にわたって農業を営んできた。先祖代々受け継いだ農地を父親が集約・集積して大規模化し、それを自身が受け継ぎ維持・拡大してきた。今後は長女とともに「Z-GIS」を活用し、さらなる合理化と拡大を模索していく。

J A常総ひかりは今後、W氏をモデルとし多くの経営体に「Z-GIS」を提案し、地域農業経営の合理化を促進していく方針である。

【全農茨城県本部 生産資材部】